

預言者と詩魂

牧師 山本 護

「預言者イザヤ及びエゼキエルと食事を共にした時、彼等はどうしてそうあからさまに、神が彼等に話しかけたと主張するのか、そう主張した時誤解されて、欺瞞のもととなることを心配しなかったかと私は尋ねた(「忘れがたい幻想Ⅱ」土居光知識)。

詩人・画家の W.ブレイク(William Blake,1757~1827)はこのように書き出し、その問いにまずイザヤが答えます。「私は有限な五官を以て神を見たことも聞いたこともない。然し私の感覚は至る所に無限を見出した～すべての詩人はそれを信ずる、そして想像力の時代においてはこの確信は山をも動かした」。

私(山本)よりちょうど二百歳年長のブレイク兄貴は冷静な幻視者であり、大胆なイメージーションで預言者の本質に迫ります。こうした「幻想」は、現代の教会や神学が扱うことのない道筋で、備えなしに踏み込んでいくには幾分危険な領域かもしれません。

ブレイクの問いに対し、エゼキエルはいつそう明晰に答えます。「東方の哲学は人間の知覚作用の原理を教えたが、知覚の根源と考えらるるものが国々によって異なっていた。我々イスラエル人は所謂詩魂を以て根本とし、他をすべて枝葉のものとした」。

国々よって多少異なるとはいえ、確かに私たちは、実生活をせよ学問体系にせよ、「知覚作用」を根本とし、「詩魂」を枝葉のものとしています。聖書の読み方や信仰でさえ、どちらかというとき詩魂は脇へ追いやられ、痩せた枝葉にされています。

早春の宵、街灯で木立の影が礼拝堂に落ちています。細い枝々は少しずつ膨らみ、しばらくするとその影は礼拝堂を覆うでしょう。イザヤが答えたような「山をも動かす」想像力は、やがて辛子種の信仰となる(マタイ 17:20)。礼拝堂は教会の本質ではありませんが、信仰で培われた想像力による果実です。八ヶ岳伝道所の誌魂、痩せている枝葉であっても、春の御言葉によってたっぷり膨らみ、次なる山をも動かすでしょう。



世界の内奥を幻視するブレイク兄貴が、寒さで縮こまっていた信仰を揉みほぐしてくれました。キリストの備えさえあれば、少しばかり危うい領域がおもしろい。Ω